



つくばね vol.29no.3

● 目次

- 1 e-journal (電子ジャーナル) と e-print archive (電子文献アーカイブ)
- 3 開学 30 周年記念特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」②
本学図書館所蔵の貴重書 (洋書) の中から
- 5 私の一冊
- 7 開学 30 周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の 30 年」③
「つくばスチューデント」のあゆみ
- 9 筑波大学開学 30 周年 (創基 131 年) 記念
附属図書館貴重図書特別展報告
- 10 「筑波大学における電子ジャーナルと文献情報データベースの利用の現状と今後についてのアンケート調査」
結果について
- 13 本学教官寄贈著書紹介
とびっくす
- 14 掲示板

e-journal (電子ジャーナル) と e-print archive (電子文献アーカイブ)

宇川 彰

1 はじめに

筑波大学電子図書館 Tulips が 1998 年 3 月に開館してから既に 5 年半が経過した。この間、蔵書書誌情報の電子化や、学位論文・貴重書等の電子資料化と並び、e-journal (電子ジャーナル) の提供が、電子図書館の主要なサービスとして急速に成長してきた。今日、多くの教官・学生にとり、電子ジャーナルは大学における研究教育環境の基本構成要素となったと思われる。

電子ジャーナルは、その使い方においてこそインターネット時代に応じた新しさを持つが、学術誌としての考え方においては従来の考え方を踏襲している。インターネットならではの学術論文の収集と提供の仕組みという意味では、電子ジャーナルに先んじて誕生・成長した e-print archive (電子文献アーカイブ) に新たな考え方の可能性を見ることが出来る。

電子文献アーカイブは、電子ジャーナルに比べて知られていないようである。本稿では、物理学

を専門とする著者のユーザとしての立場から、両者の考え方や特徴に触れ、多少拮げて今後の大学図書館における学術資料、特に学内で得られた研究成果の収集と提供のあり方について考えてみたい。

2 電子ジャーナル

電子ジャーナルは 1990 年代半ばから一部の学会誌により先鞭が付けられたが、1990 年代後半に Elsevier, Springer, John Wiley 等の大手出版社が出版雑誌の電子化を推進するに至ってタイトル数が急速に増加した。学術雑誌の総数は世界で 2 万タイトルとも 3 万タイトルとも言われるが、現在約 1 万タイトルが電子ジャーナル化されている。本学で見ることが出来るのは、現在約 3 千タイトルである。

最近発刊した学術誌には、電子版のみの完全電子ジャーナルも増えているが、電子ジャーナルの多くは従来から発行されていた冊子体雑誌が、電子版へと拡張されたものである。購読料を払い、大学の IP アドレスによりアクセスの認証を行う

サイト・ライセンス形式が多い。バックナンバーの電子資料化もかなりのスピードで進んでいる。著者の分野では、アメリカ物理学会 (American Physical Society) の発行する Physical Review は世界的にも最重要雑誌の一つであるが、1893年7月発行の第一巻から現在までに発行された全ての巻と論文が GIF 及び PDF、場合によっては postscript 形式で電子化され、読むことができる。

電子ジャーナルの特徴は、発行と同時に即時に論文を読める速報性、学内との制限はあるにせよ、図書館の所在や開館時間に関係なく、何処でも・何時でも読めること、文献検索をその場でできること、などである。いずれも、従来の冊子体の雑誌には望めない機能であり、電子ジャーナルの普及の大きな要因になった。

電子ジャーナルの問題の多くは購読費の高騰と負担の問題である。学内の何処からでも閲覧できるという共有利用的要素からして、全学の基盤設備として全学的に必要とされているタイトルを購読する方策が妥当と思われる。

3 電子文献アーカイブ

e-print archive とは、研究者が自らの論文をインターネット上のサーバーに送り、サーバー側ではこれを受け付けて保管し、世界中の研究者に自由に閲覧・ダウンロードさせる、完全にオープンで自動化された仕組みである。

理工学分野では、1990年前後から文書整形ソフトウェア TeX と postscript 描画フォーマットによる図を組み合わせて論文を作成するようになった。これ自体が、タイプライター印字と、烏口に雲形定規の作図による、それまでの論文作成手段からの革命であった。

電子文献アーカイブに投稿する研究者は、TeX と postscript 形式で論文テキストと図を作成し、そのファイル一式をサーバーに送る。サーバー側はこれを受け付けて TeX により整形された論文を postscript 形式で出力し、電子メールで著者に確認を求める。サーバーのデータベースは24時間毎に更新されるので、著者の確認が終わった論文は遅くとも24時間後の更新に反映されて世

界に公表される。新しい論文のリストは電子メールでユーザに送付される。以上の仕組みは完全に自動化されており、ユーザは、収録論文リストを見て、興味ある論文を閲覧したり postscript や PDF 形式でダウンロードできる。

電子文献アーカイブは電子ジャーナル誕生以前の1991年8月に素粒子物理学の理論研究分野から始まった (<http://xxx.lanl.gov> 現在は <http://lanl.arxiv.org/> と名前を変えている)。瞬く間に物理学、数学、計算機科学に拡がり、最近では生物学の一部まで拡大している。当初、米国 Los Alamos 研究所にサーバーが設置されていたが、現在では世界13ヶ国15ヶ所にミラーサイトが置かれている。我が国のミラーは京都大学基礎物理学研究所にある (<http://jp.arxiv.org/>)。蓄積される論文数は、アーカイブが始まって以来増加を続け、現在1ヶ月平均で約3500編、またサイトあたり接続数は1ヶ月平均100万件に及んでいる。

電子文献アーカイブでは、ユーザは新しい論文の存在を登録後1日以内に知ることが出来る。また、完全にオープンなシステムであるから、インターネットさえあれば、誰もが何時でも何処からでも自由にアクセスでき、検索も容易である。また、サーバーと技術的知識・経験さえあれば少人数で運用できる。

4 学術文献の集積と伝達

このように見てくると、電子ジャーナルと電子文献アーカイブの根本的な違いは、論文審査にあるということになる。電子ジャーナルといえども、そこに掲載される論文は、同じ分野の同僚あるいは編集者の審査を経たものに限られ、そのことによって質に関する一定の保障と格付けが与えられている。しかしながら、そのために論文がユーザに届くまでに多大の時間的ロスがある。これに対して、電子文献アーカイブでは、論文の質の判断は完全にユーザに委ねられている。その代わりに、著者と読者は時間的にも空間的にも直接結びつけられている。電子ジャーナルは従来型の学術雑誌の形態をインターネット上に移し変えているが、

電子文献アーカイブは著者と読者を瞬時に結びつける全く新しい形態を提供したと言えよう。

5 大学における学術資料の集積

筑波大学電子図書館は、学内で生み出された研究成果の外部への発信を特徴とする電子図書館を目指して開設された。電子資料登録に当たっての著作権の処理方法を具体的に定式化し、それに沿って学位論文や科研費による研究成果報告の電子資料化が進められてきたことは、その成果と言える。しかしながら、その根本にある考え方は、図書館が主体となって、学術資料を収集し、これをインターネットに載せて発信するということであり、従来の書誌収集の方式に則っている。資料を提供する著者側も、それを読む読者側も、働きかけを受ける立場にあり、著者と読者の間は間接的である。

電子文献アーカイブの成功は、著者側が主体的な学術資料の提供を行えば、著者と全世界の読者が直接繋がる仕組みを提供した点によるところが大きい。電子図書館においても、この点を参考として、学内で得られた研究成果を集積する新たな仕組みを模索すべき時期が来ていると思われる。

このような仕組みは、謂わば本学の研究活動の

電子的俯瞰図、しかも時と共に成長する俯瞰図、を作成することに似ているが、最も必要な要素は、研究者データベースとそれに連動した研究成果データベースである。研究者それぞれが論文、国際会議録、著書等を発表するときに、発表先への投稿・出稿と同時にこれらのデータベースへの登録を自動的に行うことが出来る仕組みを構築することは、その第一歩であるように思われる。また可能ならば、論文プレプリント等の成果資料そのものを電子化してデータベースに連動できることが望ましい。このような仕組みの実現には、理工系や文系等の分野による研究成果の形態や著作権の取り扱いの差、電子資料化するためのフォーマットの問題など、数多くのハードルがある。

電子図書館における学内研究成果の集積と発信の問題は、図書館の今後にとって重要なテーマの一つである。図書館部と教官が十分な共同研究・共同作業の体制を作って取り組むことが望まれる。

(うかわ・あきら 物理学系教授)

開学 30 周年記念特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」②

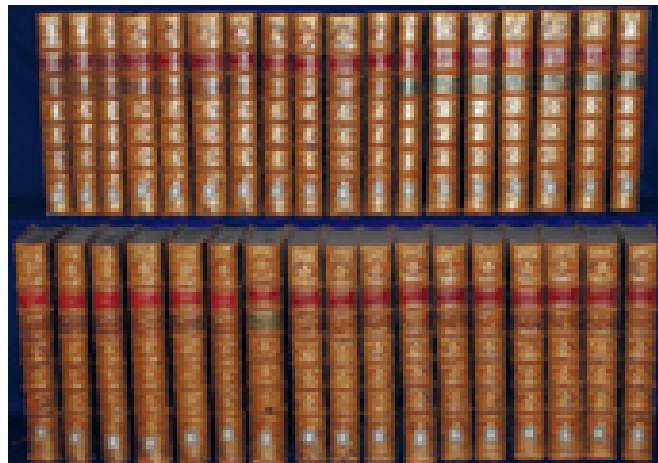
本学図書館所蔵の貴重書（洋書）の中から

立川 孝一

約 4,000 点の貴重書（洋書）の中で今回の特別展の中心にと考えていたのはフランスの『百科全書』（全 35 巻、1751～1780 年）である。わたくしの専門（フランス革命史）に近いということもあったが、図書館の委員になりたての頃、館長（当時は山内芳文教授）の案内で貴重本コーナーを見せていただき、十八世紀ヨーロッパの知を集大成したその威容に感動した記憶がある。4 折り版で縦が 40cm もあり、開くと幅は 60cm ほどになる。大学の研究室などで使うには大きすぎる書物である。しかし、十八世紀フランスの貴族やブルジョワのサロンなら、

彼らの富と教養を象徴するにふさわしい美事な装飾であったろう。

大切なのは本の中味であって外見ではないという意見もあるにちがいない。ルソーを読みたければ、初版本でなくとも、岩波文庫で十分ではないか。古書も今やマイクロ化、あるいはデジタル化されていて、それらを見ればよいではないか、と言われそうである。だが歴史家とは一見つまらないと思われることにこだわる人種であり、書物に対しても、中味（テキスト）だけでなく、むしろ外見（装丁、版型、扉のデザインなど）に惹かれたりするものなのである。



ディドロ/ダランベール『百科全書』
全35巻, 1751～1780年

特別展の準備にたずさわっている間にもいくつかの発見があった。

ひとつは『百科全書』の扉で、第1巻では「国王の特認」(APPROVATION ET PRIVILEGE DU ROY) という文字が印刷されていたのだが、第8巻ではそれがない。編者ディドロの名前も消え、出版地はパリからスイスのヌーシャテルに変更されている。何が起こったのか。つまり、第1巻刊行後に政府の見解が変わり、発禁処分となったため、編集側は国外出版を偽装することで刊行を続けたのである。当時の出版統制、そして権力との闘争(あるいは妥協)から逃れることのできなかった知識人の苦渋が伝わってくるエピソードである。

もうひとつの発見は、ディドロやルソーと同世代の哲学者エルヴェシウス(1715～1771年)の全集(全13巻, 1795年)である。これが刊行されたのは、フランス革命の最中、独裁者ロベスピエールが失脚したテルミドールのクーデターの翌年のことである。『全集』の刊行は、恐怖政治が終わり、知的関心が復活したことの反映なのだろうか。しかし革命前の哲学書と比較するなら、そのサイズは非常にコンパクトである。『エミール』(初版, 1762年)や『ヴォルテール全集』(1785年)が8折り版で、縦が20～21cmだったのに対して、『エルヴェシウス全集』は12折り版、縦13cmしかない。岩波文庫の縦15cmよりも更に小さい。



左からルソー『エミール』,
エルヴェシウス『人間論』,
『ヴォルテール全集』,
『エルヴェシウス全集』

小型化は、政治的混乱による粗製乱造の結果なのだろうか。だが実物を手にとってみた印象はそれとは異なる。活字は小さいけれども非常に精巧で、決して読みにくくはない。品のいい装丁からも、所有者は富裕で書物を愛する人であったろうと推測できる。ここから先は想像でしかないが、

持主は小さなエルヴェシウスを一冊ポケットに忍ばせて、カフェか公園の一隅で東の間の読書を味わったのち、公開の処刑を見物しようとする群集の中にまぎれこんでいったのではないかと。とにかく、書齋で静かに読書するといった時代ではなかったのである。

革命前のもっと穏やかであった時代でも、非法の地下出版物（政治的著作からポルノグラフィーまで）には小型本が多かったという。国外の印刷所からこっそり運びこむのだから、本はかさばらない方が便利だったのである。

装丁、版型、扉のデザインなどの書物の外見は、テキストを読んだだけでは分からない著者と出版者と読者の関係をわたしたちに語りかけている。それは「本物」だけが持っている歴史の重みというものかもしれない。マイクロ化あるいはデジタル化された書物には、そうした歴史の感覚が欠落してしまう危険性がある。

特別展の開催にあたっては、多くの方々から支援していただいた。展示の目玉のひとつとなった

グーテンベルクについては図書館情報学系の寺田光孝教授、コメニウスについては教育学系の山内芳文教授からそれぞれ貴重な助言をいただいた。イギリスとフランスの百科事典については、文芸・言語学系の荒木正純教授と哲学・思想学系の谷川多佳子教授に解説を書いていただいた。その他、「読者論」については、歴史・人類学研究科院生の平正人君から最新の情報を聞かせてもらった。最後になったが、書誌情報の確認や図版の作成など、図書館スタッフからは全面的な支援を得た。充実感を味わえたのも、書物という実物がそこに介在していたからだと思う。

（たちかわ・こういち 歴史・人類学系教授）

私の一冊

足立 和隆

『歩行の進化と老化』

（てらぺいあ）

〔体芸・医学 469.4-Ki39〕



本書は、文部科学省科学研究費補助金の補助を受けて平成11年度から3年間行った研究「適応能としての二足歩行運動」の報告書である。この科研費の研究代表者である東京大学理学系研究科の木村賛教授（当時）が編著を担当し、各章は研

究分担者である自然人類学を専門とする研究者および運動生理学、人体解剖学、霊長類学、医工学を専門とする研究者、総勢18名が執筆している。第1部では、ヒトが進化の過程で一般のサルと分かれるきっかけとなった直立二足歩行が、ヒトの骨格や筋の形態に対してどのような変化をもたらしたのかということ、ヒトとヒト以外の霊長類においてそれらの形態を比較することにより明らかにしている。たとえば、京都大学の石田英實教授（当時）は、ケニアで発掘しナチョラピテクスと名付けたサルの化石に関する分析を記している。この種は、初期の類人猿と考えられており、この種から直立二足歩行を行うヒトの祖先が生じた可能性が高い。また、現世類人猿と化石人類の大腿骨と上腕骨の形態から、初期人類が直立二足歩行を始めるきっかけを考察した研究、ヒトの腰椎や骨盤の詳細な形態分析、頭部を保持するために重要な役割を果たしている胸鎖乳突筋の機能と形態に関する研究、さらには生態学的な面から霊長類の四足歩行を分析した研究がある。一方、第2部では、ヒトの歩行様式の変遷を筋の生理

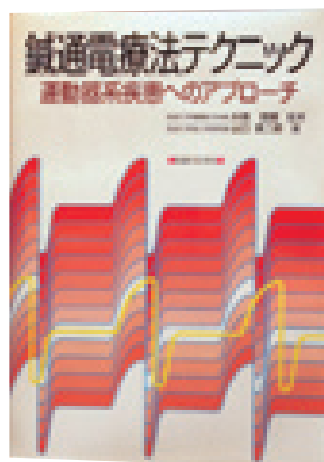
学と下肢の運動という観点から分析している。ここでは、哺乳類の足部構造の比較解剖学および筋線維の組成（遅筋，速筋）の加齢変化に関する研究，筋中の刺激伝導速度と加齢との関係を示した研究，さらに高齢者の歩行や階段昇降動作を分析した研究がある。これらの研究の視点は，いずれ

大島 宣雄

『鍼通電療法テクニック - 運動器系疾患へのアプローチ』

大島宣雄監修；山口真二郎著（医道の日本社）

〔医学 492.52-Y24〕



本書は，監修者の指導下に「鍼による物理的刺激が血液循環系に及ぼす影響に関する研究」で博士号を取得した山口博士が大学院在学中に著したものである。同氏は鍼灸師の国家資格を有しており，その長い臨床経験に基づいて書かれた本書は，鍼通電療法の本格的な教科書としては国内初のものとして好評を博しているようである。

鍼通電療法は，筋肉のこりや腰痛，神経痛などにすぐれた効果を発揮する治療法であるところから，代替医療として現在では全世界で注目を集め，様々な症状の治療に応用されている。この治療法は，鍼灸師が行う触診によって凝った筋を見つけだし，そこに無痛で刺入された細い鍼を電極として微弱な電流を通し，それによって得られる

もそれ以前の研究では顧みられていなかったものばかりであり，新たな知見が随所に見られる。各章の導入部は，あまり専門的にならないように書かれているので，一般の方々にも十分に理解して頂けると思う。

（あだち・かずたか 体育科学系助教授）

生理反応を治療に応用する物理療法である。もともとは，欧米で痛みの治療に応用されてきた電気刺激療法と，中国や日本で行われてきた鍼治療が融合して生まれた治療法である。本書の基礎編（第1～4章）では，鍼通電療法が誕生するまでの歴史，装置の解説，安全管理，効果発現の生理学的メカニズムが丁寧に解説されている。本書の中核をなす第5章では，運動器疾患を治療するにあたって必要な技術を筋肉，神経，関節の治療部位ごとに解説がなされている。

一つ一つの治療技術の難易度が各項目の冒頭に示されているため，指導者は難易度別に実習を計画することができる。第6～7章では，各疾患ごとに診察から治療の手順について解説している。著者の経験から，この方法の有効性が高いと思われる高齢者の腰痛や膝痛の治療法については特に詳しく解説がなされている。また本書は，鍼治療の解説書でありながら，難解な東洋医学の用語を全く使用していないので，西洋医学を学んだ読者なら理解しやすい内容にもなっている。ほぼすべてのページに，解剖図，検査や触診の写真，イラストが掲載されていることも本書を分かりやすくするのに役立っている。本書によって，鍼通電療法が専門家以外にもより広く理解され，活用されることを願っている。

（おおしま・のりお 基礎医学系教授）

開学 30 周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の 30 年」③

「つくばスチューデント」のあゆみ

増尾 弘美

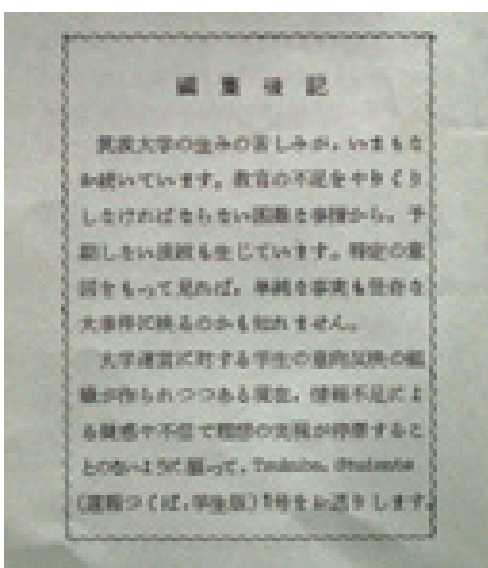
筆者は平成 12 年度から 2 年間、学生担当教官室員として「つくばスチューデント」(以下、「スチューデント」と略記)の編集・発行に携わってきた。任期中の最後に発行された 500 号記念特集号で編集長を務めたことから、本稿を執筆する次第である。

「スチューデント」のあゆみは、学生担当教官室(以下、学担室と略記)の歴史と重なる。筑波大学の開学は昭和 48 年 10 月であるが、その翌年の 11 月 29 日の評議会で「学生担当教官制」に関する規則が早くも決定、これと同時に学担室も準備され、昭和 50 年 4 月には学生担当教官の発令となった。これは全学的な学生組織を「クラス制度」を母体に作り上げ、大学運営にあたって学生との意思疎通を図ろうとする画期的な試みである。「筑波大学の建学の精神およびそれにもとづく本学の研究、教育等の在り方を十分に理解」してもらうことを目的として、「スチューデント」(当時は「Tsukuba Students」)第 1 号(B5 版、6 頁)は、同年 5 月 19 日に産声をあげた。同年 2

月、既に「速報つくば」を発行していた企画調査室より、「速報つくば」のブルー版(学生版)という位置付けで発行された。当時、企画調査室員であった高橋進名誉教授が初代学担室長となり、「スチューデント」の産みの親となる。本紙が企画調査室から独立し、現行のような学生部発行となるのは、発刊の翌年の昭和 51 年のことである。

歴史的に見ると、大学における学生向けの広報活動の発端は、大学紛争にある。一部の学生の主張や宣伝に振り回されることなく、一般学生に大学の真意を正確に伝えることを目指して、その後ほとんどの国立大学が大学と学生とのコミュニケーションの手段として広報紙を発行するようになった。しかしタイムリーな情報を提供することを目指して、長期休暇中を除いた隔週木曜発行(年間 20 回)というこの頻度の多さは本学独自のものであろう。このような努力の賜物か、昭和 63 年には「スチューデント」は国公立大学学内広報紙のうちの優秀広報紙として文部省から表彰された。しかし実のところ大学への学生の意向反映の理念が理解され、十全に機能し運用されるには長い年月を経なければならなかった。全学学類・専門学群代表者会議(全代会)が学生の意向反映の組織として機能し始めたのは、昭和 60 年代のことである。全代会議長の孤独な苦悩は「スチューデント」の行間からも読み取ることができる。「産みの苦しみ」もあったが、「育ての苦しみ」も確実に存在したのである。

誌名も英語表記は続いているものの、平成 2 年度からは「Tsukuba スチューデント」となり、平成 3 年度からは現行の「つくばスチューデント」へと変遷を遂げた。昭和の終りに、新治郡桜村からつくば市へと変わったことも影響しているのかもしれない。この頃の「スチューデント」は巻末に「インフォメーションつくば」が掲載されるな



「Tsukuba Students」第 1 号の編集後記

ど、今現在我々が目にしているものとほぼ同じである。発刊から16年、ちょうど元服といった年齢か。平成6年度からは学内の慣行に従い、B5版からA4版となった。こうして学生の意向反映の仕組みがプロパガンダの時期——満身の力を込めてその必要性そのものを説かねばならない時期——を越えて、空気のように馴染み、定着していったのである。担当副学長も平成10年度に厚生補導担当から学生生活担当へと、よりソフトな形に名称を変えた。さらに平成13年度からは本紙のPDF版も閲覧可能になり、広く学外にも公開されることとなった。内容も、初期の学術小冊子風のものから、今日の写真を多用したヴィジュアル系へと大きく変貌を遂げた。平成14年2月21日発行の500号記念特集号では、表と裏の表紙とその裏面、計4頁をカラー版とした。以降、年に数回、大学を撮影した写真を募集し、優秀作品を「スチューデント」の表紙にカラーで掲載することとなった。なおPDF版では毎号、全頁をカラーで見ることができる。

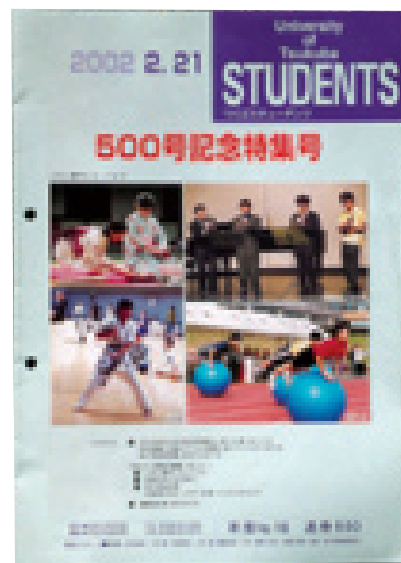
さて500号記念特集号では、一般学生の生の声を収録しようと、「これに夢中になってます」「筑波大学にもの申す」「私の筑波自慢」の3つのテーマを設定し、広く全学から原稿を集めることができた。ご尽力頂いた方々には、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。さて本号の表紙をめくると、筑波大学管弦楽団の写真がある。こ



「つくばスチューデント」第500号掲載の筑波大学管弦楽団

れどまさに筑波大学ではないか。多種多様の学類・専門学群を配し、どの分野が一つ欠けてもこのような絶妙なハーモニーは生まれなかつたらう。平成15年度からはこれに図書館情報専門学群が加わり、さらに厚みと深みを増すこととなった。総合大学の強みである。本号は開学以来の大きな変革を控え、20世紀の総決算を示す形となった。図書館情報大学との合併前の、つくばの市外局番がまだ0298（オーつくば）であった時代の、学務システムTWINSが施行される前の、国立大学法人化前の、一つの節目を刻印した。平成14年春の早咲きの桜と共に、本号は学内に散っていった。法人化後には各所で美しい花を咲かせることを、今はただひたすら祈るのみである。

(ますお・ひろみ 文芸・言語学系助教授)



「つくばスチューデント」第500号記念特集号

「つくばスチューデント」編集：筑波大学学生担当教官室

発行：筑波大学学生部

中央図書館本学関係資料室に所蔵



筑波大学開学 30 周年（創基 131 年）記念

附属図書館貴重図書特別展報告

9月29日から10月10日まで、中央図書館において特別展が開催された。和書・漢籍・洋書の貴重図書の中から、筑波大学および附属図書館のこれまでの歩みをふりかえるにふさわしい、貴重な資料を一般に公開したもので、会期中は学内外から1,243名の観覧者が訪れた。



説明に聞き入る北原学長一行



展示資料を観覧中の北原学長、林附属図書館長ら



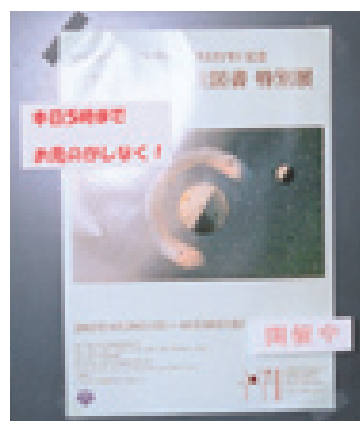
徳永事務局長に説明する芳賀教授



電子展示風景（鯨絵）



多数の観覧者でにぎわう展示室



最終日ポスター（最終日入館者204名）



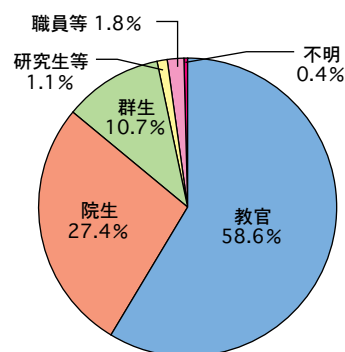
「筑波大学における電子ジャーナルと文献情報データベースの利用の現状と今後についてのアンケート調査」結果について

附属図書館では、本学にふさわしい蔵書及び電子図書館コンテンツの充実を図り、電子的資料の整備に積極的に取り組んでいます。このたび、電子的資料の整備・拡充の計画を検討するため、利用状況の把握及びご意見をいただく目的で、学内者対象にアンケート調査を実施しました。ここに、その結果をご報告します。

- 調査期間 平成15年7月30日 ～ 9月12日
- 回答数 785 (教官 460 大学院生 215 学群学生 84 研究生等 9 職員等 14 不明 (記入なし) 3)

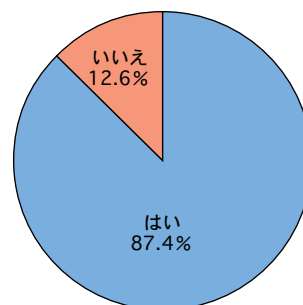
1 回答者構成

	(件数)
教官	460
院生	215
群生	84
研究生等	9
職員等	14
不明	3
合計	785



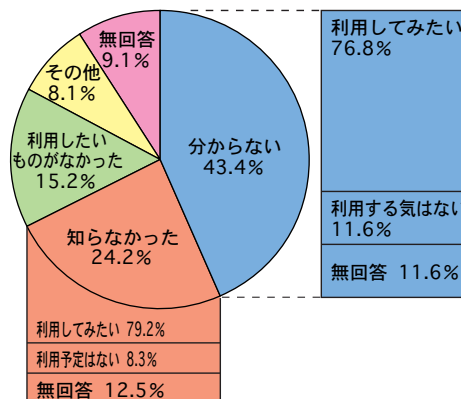
2 電子的資料（電子ジャーナル、文献情報データベース）を利用したことがありますか？

	(件数)
はい	684
いいえ	99
合計	783



3 「いいえ」とお答えになった方へお尋ねします。利用していない理由は何ですか？（複数回答可）

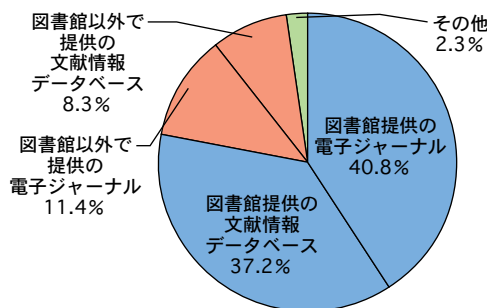
	(件数)	(件数)	
利用方法が分からない	43	利用してみたい	33
		利用する気はない	5
		無回答	5
利用できることを知らなかった	24	利用してみたい	19
		利用する予定はない	2
		無回答	3
利用したいものがなかった	15		
その他 (インターネットによる自費収集等)	8		
無回答	9		
合計	99		



4 「はい」とお答えになった方へお尋ねします。

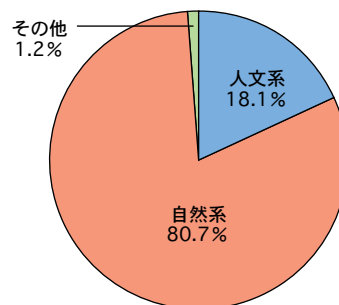
4-1 利用したことがある電子的資料は、どれに該当しますか？（複数回答可）

	(件数)
図書館提供の電子ジャーナル	608
図書館提供の文献情報データベース	554
図書館以外で提供の電子ジャーナル	171
図書館以外で提供の文献情報データベース	124
その他（無料のもの、私費での利用等）	34
合計	1,491



4-2 どの分野の電子的資料を中心に利用されますか？ 具体的な電子的資料がありましたらご記入願います。（複数回答可）

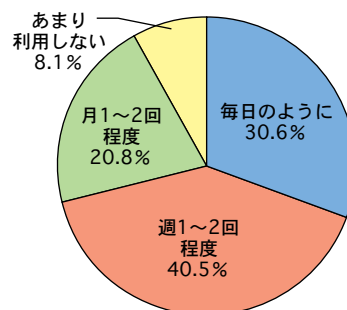
		(件数)	
人文系	人文科学分野	97	243
	社会科学分野	113	
	体育分野	29	
	芸術分野	4	
自然系	自然科学分野	359	1,085
	理工学分野	298	
	生物・農学分野	199	
	医学分野	229	
その他	17	17	
合計		1,345	



(具体的資料) ・電子ジャーナル ScienceDirect, ACS, Nature, Oxford University Press, APS, Cell, Science 等
 ・文献情報データベース Web of Science, INSPEC, BIOSIS, SciFinder Scholar 等

4-3 利用頻度はどの位ですか？

	(件数)
毎日のように	218
週1~2回程度	288
月1~2回程度	148
あまり利用しない	58
合計	712



5 すべての方にお尋ねします。

5-1 今後導入を希望される電子ジャーナル、および文献情報データベースを選択し、該当するタイトルをチェックしてください。（複数回答可）

<電子ジャーナル>	(件数)	
ScienceDirect	486	*
InterScience	339	
Springer-LINK	319	*
NACSIS-ELS	264	*
Synergy	241	*
Oxford University Press	234	*
Kluwer	225	
朝日新聞	174	*
ACS	170	*
HighWire Press	161	*

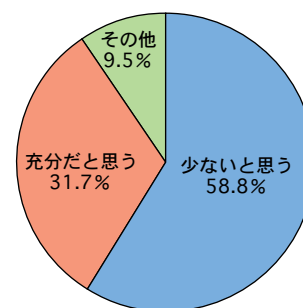
<文献情報データベース>	(件数)	
Web of Science	318	*
Current Contents Connect	305	
JCR	258	*
MEDLINE	236	*
NACSIS-IR	226	*
FirstSearch	175	*
SciFinder Scholar	149	*
IDS	147	
JOIS	146	
医学中央雑誌	128	*

注) 上位10タイトルを挙げた。*は現在利用可能なサービス。

Oxford University Pressは平成16年1月から当館からの提供は休止となっている。

5-2 本学附属図書館で利用できる雑誌（冊子体も含め）のタイトル数について

(件数)	
少ないと思う	480
充分だと思う	259
その他(コメント件数を含む)	78
合計	817

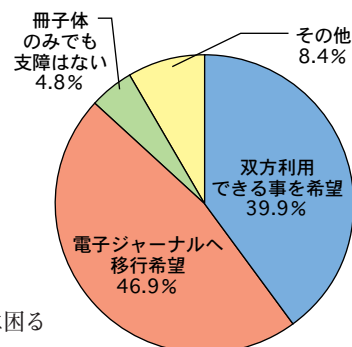


(その他の意見)

- ・分野によっては少ないと感じるものもある
- ・冊子体は充分だが電子ジャーナルは不十分
- ・タイトルの取捨選択の必要がある 等

5-3 雑誌の利用形態について

(件数)	
双方利用できる事を希望	333
電子ジャーナルへ移行希望	391
冊子体のみでも支障はない	40
その他(コメント件数を含む)	70
合計	834



(その他の意見)

- ・電子ジャーナルへの移行を希望するが、契約切れのため利用できなくなるのは困る
- ・各タイトル冊子体、電子体のいずれかでよいのでは
- ・利用頻度等により利用形態を配慮して欲しい 等

6 今後の電子的資料の利用について期待すること、またご意見等ありましたらご記入下さい。

() 内は同様の意見の数

- 電子的資料の一層の充実を希望するもの (49)
 - ・タイトル数、アクセス数、年代等の利用の拡大をして欲しい
 - ・他大学に比べてまだまだ充実度が低い
 - ・電子的資料は迅速に文献を入手する手段として必要である 等
- 現在導入されていない具体的なタイトルを希望するもの (43)
- 電子的資料の検索環境に関する意見 (17)
 - ・検索方法の簡便化をして欲しい
 - ・大学の外からの検索を可能にして欲しい 等
- 冊子から電子ジャーナルへの移行を希望するもの (14)
 - ・電子ジャーナルは検索に便利で、冊子と比べて場所を取らないメリットがある
 - ・冊子を減らす代わりに、電子ジャーナルの利用を拡充して欲しい 等
- 電子的資料への全面的移行に対する懸念 (9)
 - ・冊子は必要
 - ・電子ジャーナルが契約切れ、事故等で使用不可となるのは困る 等

※その他、多機関との連携の提案、利用に関しての情報提供希望等

総意見数 186

今回の調査で、電子的資料の利用率の高さ、電子的資料の一層の充実を望む声が非常に多いことが改めて認識され、現在導入されていない電子的資料の導入希望も数多く寄せられました。また、電子的資料の利用に関する意見、情報提供の要望等も頂き、今後の電子的資料の整備、サービスの拡充を推進して行く上で、大変参考になる有意義なものとなりました。ご協力ありがとうございました。

なお、この結果は、以下の電子図書館 Web ページでもご覧いただけます。

URL <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/>



本学教官寄贈著書紹介

平成 15 年 7 月～ 9 月に寄贈を受けた本学教官の著書を紹介します。

(敬称略, 寄贈者五十音順, 所属は平成 15 年度のものであります。〔 〕内は配架場所と配架番号です。)

足立和隆 (体育科学系)

- ・ 歩行の進化と老化 / 木村賛編著. てらぺいあ. 2002 (人間科学全書・研究報告シリーズ; 1) [体芸, 医学 469.4-Ki39]
- ・ よくわかる筋の機能解剖 / 足立和隆訳. メディカル・サイエンス・インターナショナル. 2000 [体芸, 医学 491.169-Ki43]

大島宣雄 (基礎医学系)

- ・ 鍼通電療法テクニック / 山口真二郎著. 医道の日本社. 2001 [医学 492.52-Y24]

木越英夫 (化学系)

- ・ ウォーレン有機化学 上, 下 / 石橋正己 [ほか] 訳. 東京化学同人. 2003 [中央 437-W39-1,2]

駒井洋 (社会科学系)

- ・ 移民政策の国際比較 / 小井土彰宏編著. 明石書店. 2003 (講座グローバル化する日本と移民問題; 第 1 期第 3 卷) [中央 334.41-Ko98-3]
- ・ 移民の居住と生活 / 石井由香編著. 明石書店.

2003 (講座グローバル化する日本と移民問題; 第 2 期第 4 卷) [中央 334.41-Ko98-4]

庄司進一 (臨床医学系)

- ・ 生・老・病・死を考える 15 章. 朝日新聞社. 2003 (朝日選書; 730) [中央, 医学 490.15-Sh96]

副田義也 (名誉教授)

- ・ あしなが運動と玉井義臣. 岩波書店. 2003 [中央 373.4-Ta77]

徳田克己 (社会医学系)

- ・ ヒューマンサービスに関わる人のための教育心理学 / 高見令英共編著. 文化書房博文社. 2003 [中央, 医学 371.4-To35]

守屋正彦 (芸術学系)

- ・ 筑波大学附属図書館所蔵狩野探幽等江戸前期屏風の研究. 筑波大学芸術学系守屋研究室. 2003 [中央本学, 中央, 体芸 721.4-Ts66]



とぴらくす

【見学者】

- | | |
|-----------------------------|-----------|
| 韓国 大邱大学校総長一行 | 10月30日(木) |
| ロシア サンクトペテルブルク光学・精密機械大学学長一行 | 11月6日(木) |
| JICA 中等教育開発コース研修生 | 11月13日(木) |
| 台湾 垂東関係協会会長一行 | 11月13日(木) |

【学外会議等】

第37回関東地区国立大学附属図書館職員研修会

10月23日(木), 24日(金)の2日間埼玉大学において「情報リテラシー教育における図書館の役割」について研修を行った。

第16回国立大学図書館協議会シンポジウム (東地区)

11月27日(木)に一橋大学において「国立大学法



人化を見据えた大学図書館経営について」講演会、
討論会等を行った。

【学内会議】

第259回附属図書館運営委員会（9月）

平成16年度雑誌購入について及び平成16年度電

子ジャーナルの利用契約について審議が行われ
た。その他、各専門委員会、専門図書館委員会か
らの報告等があった。



掲示板

中央図書館本館3,4階配架の重複図書及び影印 本の新館への別置について

中央図書館本館3階・4階の書架狭隘化を改善
するため、重複図書及び3階の影印本の一部を新
館に別置しました。重複図書については、利用の
少ないものを選択し、1冊は本館に残してありま
す。詳細は以下のとおりです。

1. 別置先

本館3階配架の重複図書及び影印本の一部→新
館3階書架

本館4階配架の重複図書→新館4階書架

2. OPACの表示

別置した図書の所在表示：中央新館青（青色の
ラベルが背に貼ってあります。）

検索結果の所在をクリックすると、配置図が表
示されます。

3. 利用

従来の重複図書（新館緑）と同様に貸出・閲覧・
複写が可能です。ただし、閲覧・複写した場合に
は必ず新館の元の位置に戻してください。

附属図書館の年末・年始の休館、冬季休業に伴う 貸出期間の変更のお知らせ

○年末・年始の休館

平成15年12月26日（金）

～平成16年1月5日（月）

○貸出期間の変更

平成15年12月4日（木）から12月25日（木）まで
の間に一般貸出を受けた図書の貸出期間は、通常
の3週間より長くなります。

これらの図書の返却日は、平成16年1月8日（木）
から1月21日（水）の間のいずれかの日になります。

返却期限を確認し、延滞のないように注意して
ください。

不明な点がありましたら、各館のメインカウン
ターまでお問い合わせください。

